



# 森林整備事業への道

**Tamura**  
株式会社田村組



# □キツカケ「山が灰色になる!？」

そんな危機感を抱いたのは、20世紀もまもなく終わろうとしていた頃でした。当社はそれまで、土木工事会社として、崩壊した山腹を早期に復旧するため、あるいは土砂災害の危険を未然に防ぐために、数多くの土留（どどめ）と呼ばれるコンクリートの構造物を造ってきました。

しかしながら、これらはいくまで二次的な措置であり、本来、山崩れを防ぐには、森林を適正に管理する必要があります。特に奥三河地域のように、人工的に植えられた杉や檜が中心の山では、そうでなければ、いくら土木工事で補強しても、山は次から次へと崩壊してしまいます。すると、最終的にはすべてコンクリートで覆われたような灰色の山ができてしまいかねません。



# □ハジマリ 「田村組がやらねば誰がやる」

その頃の林業界はといえば、安い外材の輸入の影響により国産材の価格が低迷するとともに、屋外での厳しい労働環境から新規就業者が増えず、担い手は高齢化するなど、大変厳しい状況にありました。一方、東三河の水源地である森林を守らなければと、下流域から多くのボランティアの方々が山に来て、間伐作業に汗を流してくれていました。しかしながら、1000キロ平方メートルに及ぶ奥三河の広大な面積の88%を占める森林の整備を担うのは、とても困難なことです。

そのため林業の機械化の必要性が問われるなか、林地での重機作業実績も豊富な土木工事会社が森林整備を手がけることにより、少しでも地域のお役に立つことができればと思い、平成16年、当社の重機オペレーターであった若手職員2名を、木こりとして育成することになりました。



# □ザセツ 「言うは易く、行なうは難し」

当時の社長や工事部長が個人で所有していた山を研修フィールドとして借り受け、市民活動を通じて知り合った林業経験者の方に講師を依頼し、手探りの中で取り組み始めました。チェーンソーの資格を取得し、立木の伐倒方法を学び、さらには木材の搬出・運搬・販売方法まで、一連の流れを経験したものの、まったく採算は合わず。また、施業地の確保と高額な林業機械がネックとなり、事業の拡大も思うように進みませんでした。そのため、地元森林組合からの下請仕事や自社の土木工事現場で発生する支障木の伐倒などで、技術の向上を図る日々でした。

そうした中、森林組合の合併により仕事が減少し、木こり養成中の社員が家庭の事情で退職するなど、当社の森林整備事業は一時、暗礁に乗り上げそうになりました。



# □フタタビ 「チャンス逃すな！」

平成21年、愛知県では森と緑の持つ様々な公益的機能を発揮するために「あいち森と緑づくり税」が導入され、この税収によって森林・里山林・都市緑化の整備が促進されることとなりました。

そこで、こうした公共事業の受注に向けて社内体制を強化するために、森林整備専門部署となる環境事業部を設立。それまで土木工事の現場監督を務めていた者をリーダーに任命し、熟練オペレーター1人を配置転換。さらには林業経験者1名・未経験者2名を中途採用しました。そうして不転の決意を内外に示すとともに、これまで土木工事で培った施工管理の経験とノウハウを森林整備に活かすことにより、他社に負けない質の高い現場管理の実現を目指しました。

「あいち森と緑づくり税」 <http://www.pref.aichi.jp/0000014207.html>



# コツコツ 「流した汗は報われる」

平成22年6月、前年度に愛知県新城設楽農林水産事務所から受注した「平成21年度保安林整備事業（保育）第18号工事」が、愛知県森林協会の優良工事表彰を受賞しました。そもそも森林整備工事が受賞対象となることは極めて稀で、ましてそれを土木工事会社が受賞することは、おそらく初めての出来事でした。

森林整備事業へ参入した当初は、土木工事会社が施業することに対して、山主さんたちから不安の声が聞かれました。荒っぽいやり方で山を滅茶苦茶にされてしまうのではないかと。しかし、実際に間伐した後の山の状態を見ていただいたり、こうして公の機関から表彰していただいたことにより、山主さんたちからも信頼していただけるようになりました。



# □アラタニ「世代をつなぐ」

構造改革により断行された公共事業費の縮減。相次ぐ公共事業に対するバッシング報道。その影響による新規採用の抑制と若者の就職意識の変化により、気がつけば10年もの間、新卒者の入社がなく、社内に空白の世代（10～20代が不在）が生まれてしまいました。

平成23年4月、久しぶりに10代の新卒者が入社。それも、林業科から。森林整備専門部署を設立してから、まだ3年。林業界もいまだ先行きが見えにくい状況下で、高校も家族もともに不安があったことと思います。その不安を払拭し、早く1人前の木こりとして存分に活躍してもらうために、いま、「緑の雇用制度」を活用しながら現場実習を重ねています。

「緑の雇用制度」 <http://www.ringyou.net/>



# □ミライへ「山を守ることは未来を守ること」

「10年後の木材自給率50%以上」、平成21年末に発表された「森林・林業再生プラン」に、そう力強くうたわれています。そして平成23年度より、これまでの切捨て間伐に対する補助金をやめ、出材した量に対する補助金に切り替え、国産材の流通を促進させることで外材からの需要を取り返し、強い林業を再生させようと、国も動き始めました。

国も県も地域もNPOも皆が今、「森を何とかしなければならぬ！」と立ち上がっています。私たち田村組も、引き続きこの奥三河の森林の適正管理を図るとともに、今後は木材の安定供給にも取り組んでまいりたいと考えています。効率的な木材供給システムの構築には、まだまだ諸課題があります。しかし、さらなる技術の研鑽と情報の集積、そして知恵の創出によりそれらの困難を乗り越え、林業の再生による地域の再生を目指して歩んでまいりたいと思います。

